

グローバルエンジニア育成事業

令和3年度事業実施内容及び令和4年度事業実施計画に関するヒアリング説明資料

事業名：“青い鳥”GLOBAL CHALLENGE PROGRAMの構築

基礎力養成：低学年基礎力の育成とIB認定による国際的質保障

高度育成：CDIOイニシアティブ活用による高度グローバルエンジニア育成

徳山工業高等専門学校

事業名：“青い鳥”GLOBAL CHALLENGE PROGRAMの構築 基礎力養成：低学年基礎力の育成とIB認定による国際的質保障

事業概要

徳山工業高等専門学校は、「世界に通用する実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」という学習・教育目標を掲げ、“高い倫理観”をベースとして地域企業群のグローバル化を支える実践的技術者の育成を目指している。本事業は、「グローバル人材育成支援事業（展開型）」（平成28～30年度）の発展・展開事業として、本校の学生が地域企業群のグローバル化を支える人材として、世界共通言語としての英語力、さらに英語力には留まらない異文化対応能力、地域のグローバル化における課題を発掘し、それらの課題を様々な文化的背景を持つ人々とともに解決するための課題解決力などを身につけることを目指し、KOSEN4.0イニシアティブ事業で試行を開始した「技術者教育パッケージ」のプログラムとして、低学年「青い鳥 Global Challenge Program」を構築し、最終的にIB「日本語DP」を開発して、真に国際的な基準の教育プログラムとしてIB認定を取得する事業である。本事業は、高度育成事業と連動して実施する。

課題

本事業申請に当たって、課題は主に4つある。1つ目は、海外語学研修の単位化である。本校ではこれまでもアジアを中心とした海外研修の拡充を図ってきたが、特に語学研修に関して、その正課としての単位化が急務である。2つ目は、英語課外授業の組織化と単位化である。現在も教員が自主的に課外で少人数英語指導を行い、またKOSEN4.0イニシアティブ事業で導入した「モジュール授業」と併せて組織的な課外授業運営にも努めているが、語学力向上を目指した課外授業・指導の単位化は必須であると考えられる。3つ目は、汎用的能力育成のための教育プログラムの構築である。4つ目は、人員の確保である。現在、本校の専任英語科教員は2名で、通常業務以外に新たな取り組みが検討しづらいのが現状と言える。また、小中学校での英語教育の充実を受け、それらとのスムーズに連携し、真に国際的な教育レベルの質を保証するため、IBなどの国際的な質保証プログラムの認定が必要である。

課題解決の取組

本校では、本科低学年（1～3年次）をグローバルな技術者としての素地を身につける段階として捉え、低学年「青い鳥 Global Challenge Program」として、以下のような取り組みを行う。

- ① 低学年での海外研修プログラムを単位化し、早期に英語コミュニケーション能力育成の必要性を認識させるとともに、異文化理解への態度の育成を図る。
- ② 英語関連授業の指導内容や方法の見直しを行い、アクティブラーニングの要素を取り入れながら、文法や語彙といった基礎をしっかりと定着させ、その基礎の上で、特にペアワークやグループワークを中心としたコミュニケーション活動を中心とした授業実践を行う。
- ③ 課外授業の充実と単位化を図る。主な内容として、リメディアル、実践的英会話、調音音声学など普段の業で扱うことが困難な内容を盛り込むだけでなく、海外研修の準備講座としても機能させる。
- ④ すでに本校で科目として単位化されているe-learningの拡充を行い、オンライン英会話や各種試験対策（TOEIC、英検など）を通して、より実践的にまた確実な英語力育成を目指す。なお、定期的なカウンセリングを行い、学習ポートフォリオを活用しながら、学習状況の管理を徹底する。
- ⑤ 英語学習への動機づけを高め、汎用的能力を育成する取り組みとして、「学科学年横断縦断型STEAMsプログラム」を構築し、その中で「技術者教育パッケージ」としてDrama ProductionやMovie Makingを実施する。
- ⑥ 英語科目以外の科目で、CLIL等の手法を用いて英語で授業を実施し、英語で学ぶ機会を増やす。
- ⑦ 上記取り組みの結果として、IB「日本語DP」を開発し、真に国際的な基準の教育プログラムとして、本事業最終年度にIB認定（日本語DP）を取得する。

事業名：“青い鳥”GLOBAL CHALLENGE PROGRAMの構築

高度人材：CDIOイニシアティブ活用による高度グローバルエンジニア育成

事業概要

徳山工業高等専門学校は、「世界に通用する実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」という学習・教育目標を掲げ、“高い倫理観”をベースとして地域企業群のグローバル化を支える実践的技術者の育成を目指している。本事業は、「グローバル人材育成支援事業（展開型）」（平成28～30年度）の発展・展開事業として、本校の学生が地域企業群のグローバル化を支える人材として、世界共通言語としての英語力、さらに英語力には留まらない異文化対応能力、地域のグローバル化における課題を発掘し、それらの課題を様々な文化的背景を持つ人々とともに解決するための課題解決力などを身につけることを目指し、KOSEN4.0イニシアティブ事業で試行を開始した「技術者教育パッケージ」のプログラムとして「青い鳥 Global Challenge Program」を構築し実施する。本事業は、基礎力養成事業と連動して実施する。

課題

これまでの取り組みで構築された海外語学研修等は科目として単位認定されていない。より多くの参加者を確保するためには「技術者教育パッケージ」の個別最適化学習プログラムとして単位認定科目とする。また研修への参加時期などの課題もある。特にトビタテ！留学JAPANへの申請には派遣時期が大きな問題となっており長期の海外派遣が困難な状況である。そこで、クォーター科目の一部導入により本科3・4年次及び専攻科1年次において「サービ斯拉ーニングターム」を設け、海外研修やインターンシップ等に参加しやすい学事歴を構築し、国内外での英語力や異文化対応力を育成する教育プログラムの開発が必要である。さらに教職員のグローバル化への対応スキル（英語によるメールのやり取りや異文化理解力など）の向上も課題である。

課題解決の取組

“青い鳥” Global Challenge Program は、学生が国内外のフィールドで様々な国際的な学修活動を行うプログラムである。それは必ずしも国外での活動というだけでは無く、国際的な課題に取り組むための国内や学内での幅広い活動も含み、これらの活動を通して、グローバルな技術者として必要な課題発見力、課題解決力、コミュニケーション力、異文化対応力を育成する。そのために以下の取り組みを行う。

- ① 「サービ斯拉ーニングターム」を導入し、長期にわたり国際的なフィールドで様々な活動を行うことが出来るように学事歴を変更する。
- ② 個別最適化学習システム「技術者教育パッケージ」の一部として“青い鳥”Global Challenge Program 実施する。
- ③ “青い鳥” Global Challenge Program では事前学修、事後学修及び成果発表会を含めた「グローバル・スタディーズ」「グローバル・ディスカバリー」「グローバル・アクション」の3つの学修コースを開講する。
- ④ これらの多様な学外学修の成果は、本科では「教養基礎科目」として、専攻科では「長期インターンシップ」として単位認定する。
- ⑤ 成果は外部英語検定試験（TOEIC等）、異文化対応力テスト、AI Grow等のジェネリックスキル測定により確認し、プログラムの改善を継続的に行う。
- ⑥ 教職員の海外研修をフィリピン大学ディリマン校等の協定校において実施する。
- ⑦ CLILコンテンツの作成と、これを用いた英語による授業を実施する。
- ⑧ CDIOイニシアティブ加盟（低学年ではIB日本語DPプログラム認定）を申請する。

事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM

IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

地域企業群のグローバル化への対応と、学生の質の保証を実現するためには、教育改革の推進とカリキュラムマネジメントを中心とした教育課程全体の国際標準での改革が必要である。そこで国際的な視点から教育改革を推進するため**CDIOイニシアティブ**に加盟するとともに、海外協定校と「クロスアポイントメント制度」を構築し、教員の相互交流により教育の国際化を実現する。さらに「サービラーニングターム制度」を導入し、協定校との間で学生の派遣・受入を促進し、国際ボランティア、インターンシップなどを通じて国際化を推進するため教育課程を再編成する。その成果として本科3年次までの教育プログラムの**IB認定**取得を目指す。

地域企業群からの要請 平成27年度
(高専機構教育改革推進プロジェクト：平成27年度アンケート調査)

- 国際社会を舞台に活躍できる人材
- 化学・化学工学の知識修得
- コミュニケーション能力 (英語力を含む)

大学教育再生加速プログラム (AP) 平成28～令和元年度

- “安全・安心志向型”徳山コアカリキュラム (TCC) の構築
- 継続的なキャリア形成が可能な信頼できる保証体制の構築
- キャリア教育支援システム (キャリアP) を活用したディプロマ・サブリメント (DS) 開発
- 学生の学びを促進するための環境の整備と教育力の向上

グローバル高専事業 (展開型) 平成28～30年度

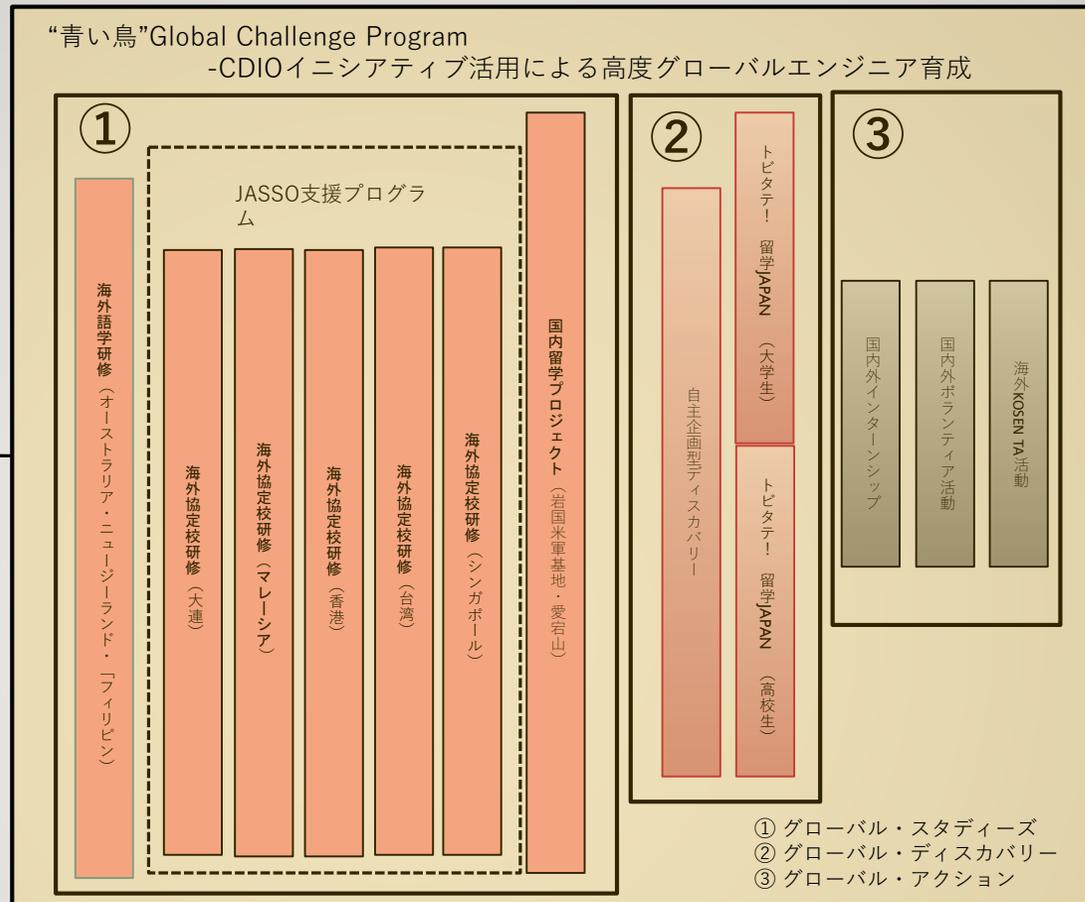
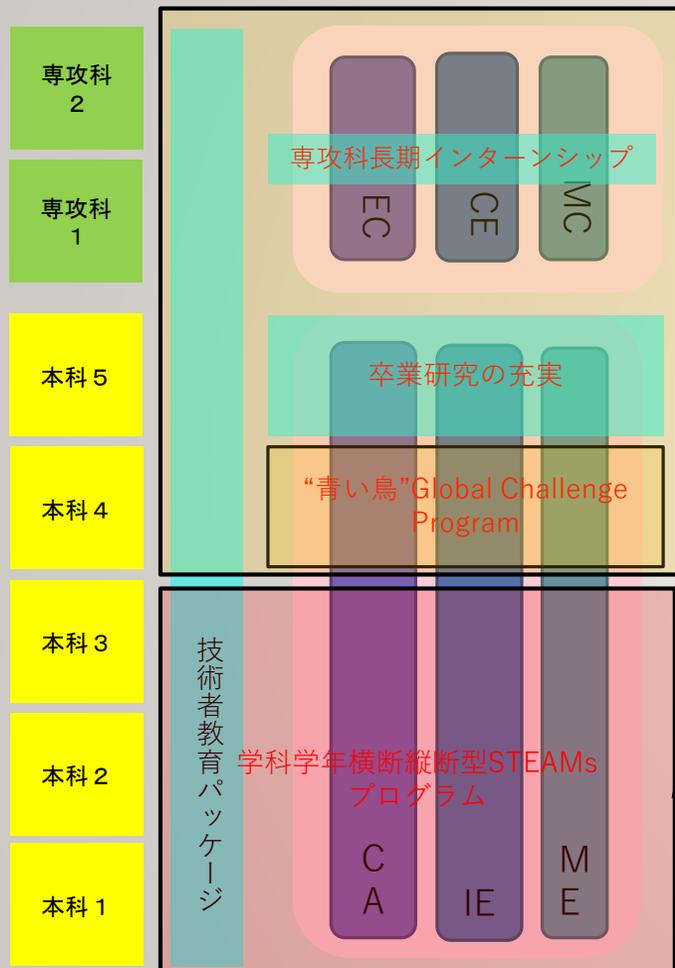
- 異文化に対する理解
- グローバル化に対応するための「知識を学ぶための方法」
- グローバル化に対応するための「課題発見・解決力」
- グローバル化に対応するための「高度な専門知識」
- 英語による一般科目・専門科目の推進
- 教材の開発・出版 (異文化理解系)

グローバルエンジニア育成事業 令和1～5年度
(グローバルエンジニア基礎力養成プログラム)

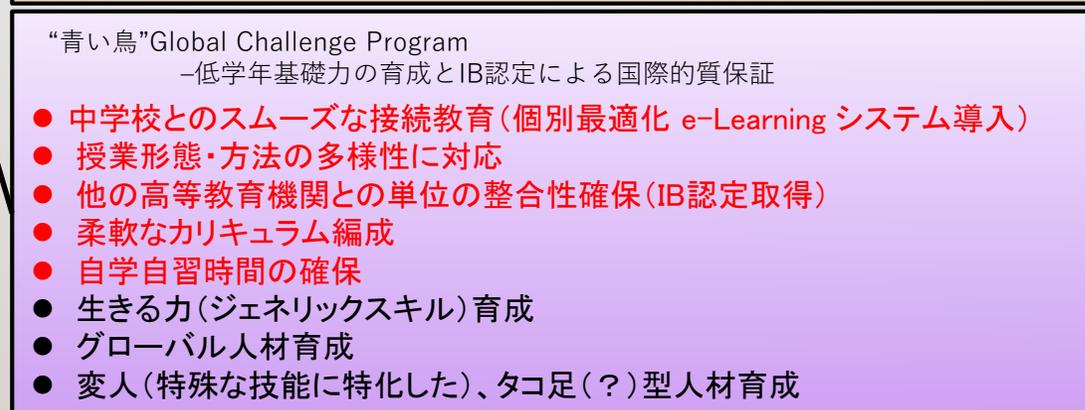
- 中学校とのスムーズな連携教育
- アダプティブ英語 e-Learning システム導入
- 授業形態・方法の多様性に対応 (CLILコンテンツの開発・出版)
- 英語科目以外の授業の英語化
- 海外語学研修等の単位化
- 柔軟なカリキュラム編成 (完全セメスター制：クォーター科目の導入)
- 自学自習時間の確保 (カリキュラム再編：学修単位科目整理)
- 学科学年横断縦断型STEAMプロジェクト導入
- Ai Grow 等による異文化対応力等の可視化
- GTEC 4 技能試験による英語力の可視化
- IB (日本語DP) プログラム認定取得
(高度グローバルエンジニア育成プログラム)
- 個別最適化「技術者教育パッケージ」単位化
- サービス・ラーニングターム導入
- “青い鳥” Global Challenge Program 構築
- TOEIC、TOEFL等による英語4技能の可視化
- Ai Grow 等による異文化対応力等の可視化
- 教職員海外研修の強化 (フィリピン大学ディリマン校等)
- ディプロマ・サブリメント (DS) 英語版発行
- CDIO イニシアティブ加盟



“青い鳥” Global Challenge Program



高度人材



基礎力育成

事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM

IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

・ 取組事例 1

スウェーデンNTI Nacka高校との「ライブ異文化交流会」を4回開催。各回にテーマを設定し、学校生活、クリスマスやお正月の過ごし方、バレンタインデーなど両国の違いをプレゼン形式で紹介した。また、少人数のグループに分かれ、自由なテーマで対話を実施した。後半の2回の交流では、両校の2名の学生実行委員が企画運営に挑戦し、SNSを使って英語で意思疎通を図りながらひとつの目標に向かって一緒に取り組むことで、交流会自体の一体感が生まれた。

・ 取組事例 2

モンゴル工業技術大学附属高専、新モンゴル高専、モンゴル科学技術大学附属高専とオンラインで2件の国際的な技術交流を実施。1件目は、「科学教材を用いたCOIL型プロジェクトの構築」で、モンティホール問題とパーティクルフィルタの状態推定法について学習した後、ライントレースカーをプログラミングして実際に動かす実験を行った。かなり難しい内容だったが、わかりやすい講義で、モンゴルの学生たちは大変興味を持って取り組んでいた。



スウェーデンNTI Nacka高校との「ライブ異文化交流会」の様子



モンゴル3 KOSENとの交流の様子

事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM

IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

・ 取組事例 3

徳山高専が推進するグローバル人材育成の取り組みを紹介する動画を公開した。<https://youtu.be/zqDydlrXLbo>

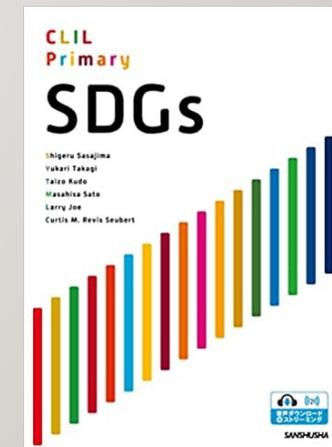
本校が目指すグローバルエンジニア育成とは何か？また、言語、文化、価値観の壁を越えて、どこでも活躍するために必要な能力を身につけるため、実際にどのように学んでいるのか？ 徳山高専の学校紹介【グローバル人材育成編】。



グローバル人材育成を動画紹介

・ 取組事例 4

グローバル高専育成支援事業で雇用しているアメリカ人教員 Mr. Curtis M. Revis Serbertが「CLIL Primary SDGs」を三修社から出版した。CLIL授業は、本科1年生ではライフサイエンス&アースサイエンス担当日本人教員が、5年ほど前から開始し、専攻科では、いわゆるハードCLIL「Engineering Mathematics」をドイツ人教員が既に実施している。

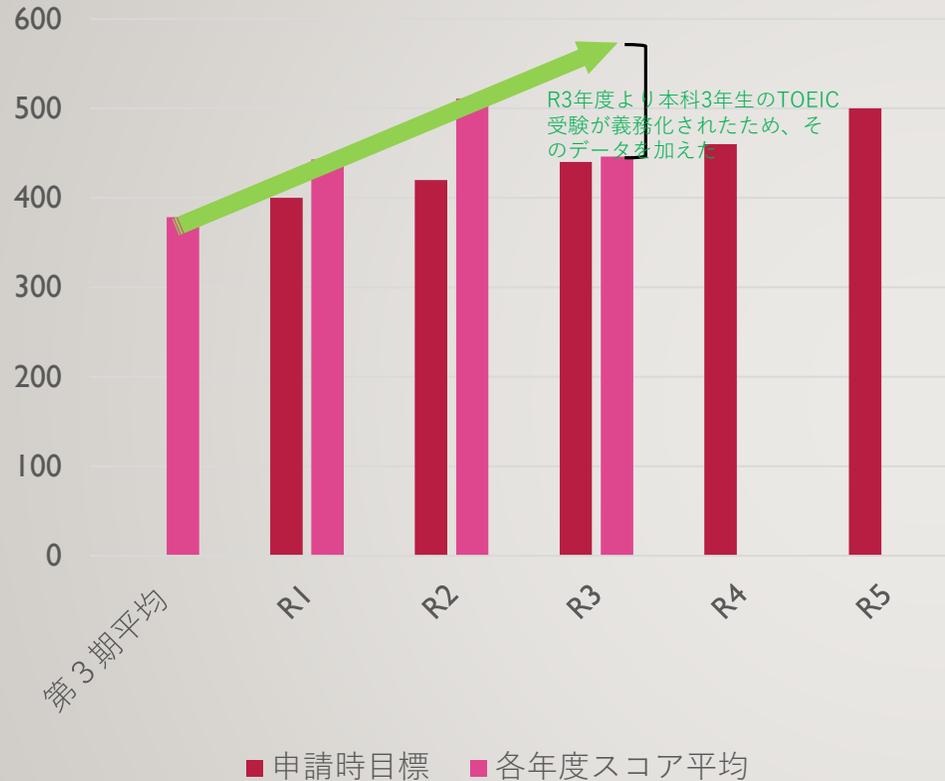


CLIL教科書の出版

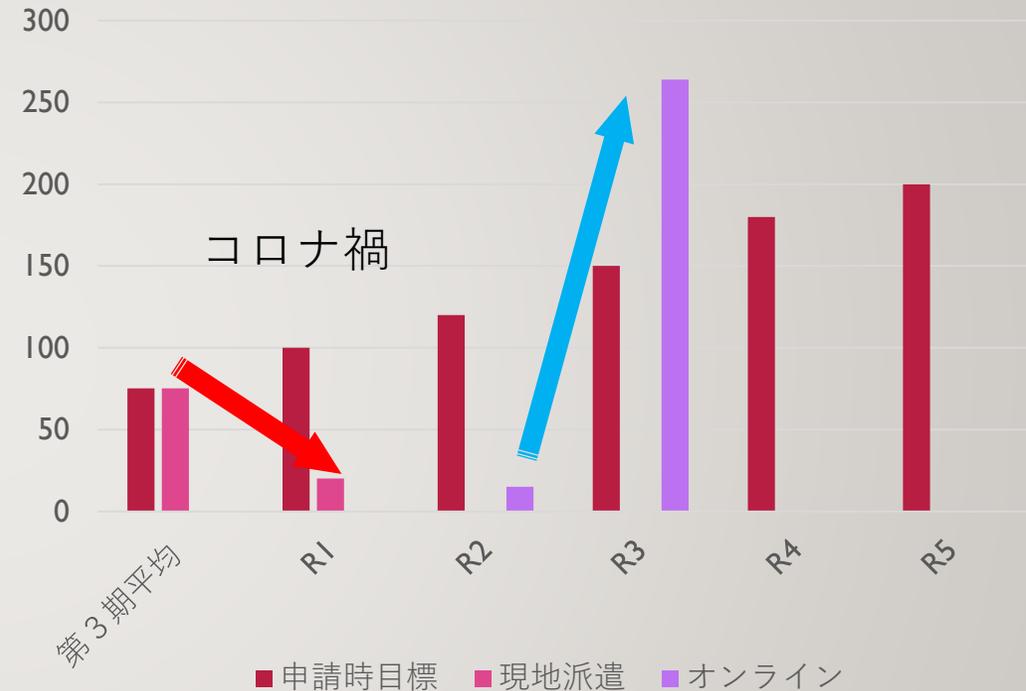
事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM

IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

指標① 本科卒業時のTOEICスコア平均



指標② 海外経験・海外活動



指標① TOEICスコア平均に関しては、順調に伸びていたが、コロナ禍が始まり、海外研修等が全て中止となり、またR3年度から本科3年生にもTOEIC受験を義務化し、そのスコアを含めたため、R3年度は、かろうじて目標値を上回る程度にスコアが減少した。

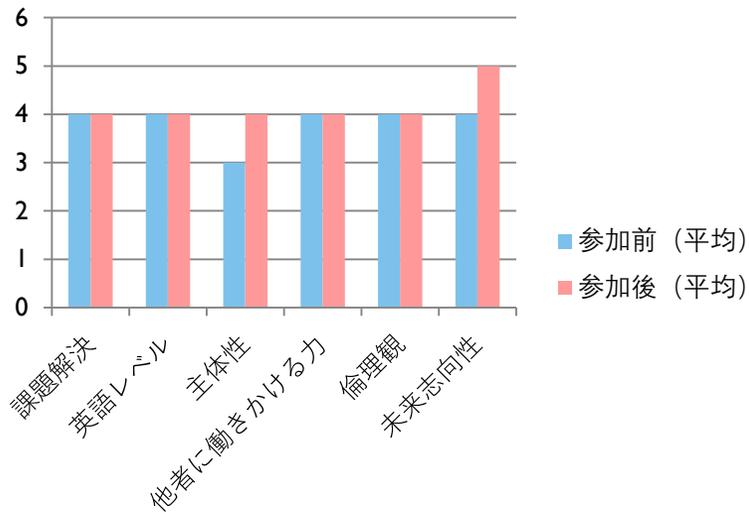
指標② 海外経験・海外活動は、第3期に急激に参加者数が増加し100名を超え、小規模校であるが、トビタテ！留学JAPAN採択数やJASSO支援プログラム数も全国高専でトップクラスだったが、R1年度3月の派遣を最後とし、現在まで、実際に海外への派遣は中止した。R2年度からオンラインによる交流プログラムの構築を開始し、R3年度には参加学生数が250名を越えた。R4年度には、海外研修の再開を目指す。

事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM

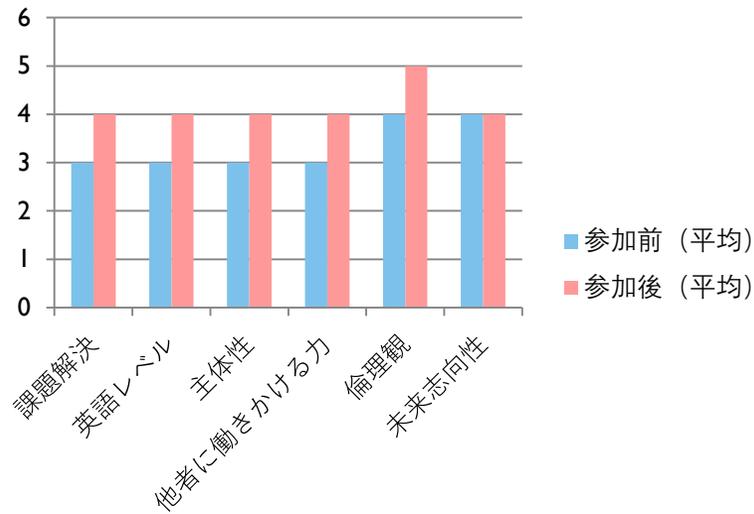
IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

オンライン交流に関するアンケート結果

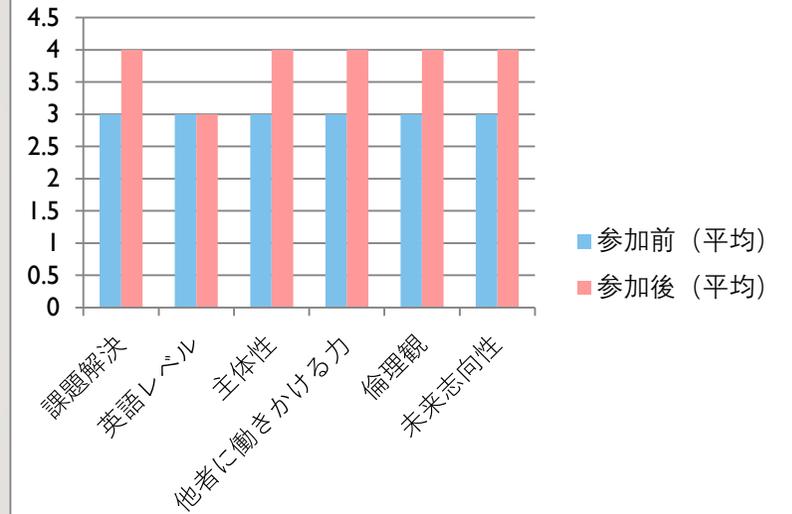
香港IVE・長野高専との合同オンライン学習



シンガポールポリテクとの共同プレゼンテーション



大連・中国地区高専との合同研究発表会



アンケート結果の分析

オンラインでの交流事業でも、参加後に主体性、倫理観、未来指向性などが顕著に上昇した。従って、特に本科低学年の学生には、手軽なオンラインでの交流が、高学年で実際に海外で研修を受ける動機になり得る。

事業名：“青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM：まとめ

近未来のKOSEN教育を考える

個々の高等教育機関がグローバル化に対応した教育、研究体制、制度、あるいは施設を整えることは、設置基準等で必要不可欠な条件とされている訳ではない

各高等教育機関がグローバル社会への対応を目指した教育を行うのか、あるいは行わないのか、そして行う場合には、**どのような教育目標を設定して、どのような教育を提供するのかは各教育機関の自由裁量**

【本校の学習教育目標】

「**世界に通用する**実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」

では、どのようなKOSEN教育を提供する？

国際化のために可能なプログラム

活動タイプ	取り組み例	
アカデミック・プログラム	<ul style="list-style-type: none"> • 外国語学習 • 海外での活動・学習 • 国際的な学生 • 国際化されたカリキュラム (CDIOやIB) • 地域の学習あるいはテーマ別の学習 • 教授・学習プロセス (アクティブラーニング) • 異文化トレーニング • 教員/スタッフ移動性プログラム (連携授業→?) • 交換学生プログラム • ジョイント/ダブルディグリー・プログラム • アカデミック・プログラムと他の戦略のリンク 	
研究的・学術的協働	国内	<ul style="list-style-type: none"> • 国際会議やセミナー • 学術及び他分野での国際研究 • 共同研究プロジェクトと出版 • 地域とテーマ別のセンター • 国際研究協定 • 交換研究プログラム
国内・海外活動	国外	<ul style="list-style-type: none"> • 国際開発支援プロジェクト • 教育プログラムの海外へのデリバリー (モンゴルKOSEN協力支援校) • 国際的な連携、パートナーシップ、ネットワーク • 契約に基づいたトレーニングや研究プロジェクト • 卒業生海外プログラム
カリキュラム外の活動	<ul style="list-style-type: none"> • 学生クラブや連合 • 国際的・異文化間のキャンパス・イベント • コミュニティ基盤の文化的・民族的グループとのリエゾン • ピアサポートのグループやプログラム 	

視点I： 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

【本校の学習教育目標】

「世界に通用する実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」

(A) 「世界に通用する」技術者をめざすために

(A1) 複合分野の基礎となる基本的素養を身につけること

- ・ 数学・自然科学・基礎工学の科目を修得する
- ・ 学士を取得する

(A2) 国際理解を深め、技術者としての倫理観とコミュニケーション能力を養うこと

- ・ 国際文化・技術者倫理・日本語・外国語の科目を修得する

協調性
新しい価値を創造する能力
次世代までも視野に入れた社会貢献の意識

教育プログラムはない

基礎力養成の教育改革と国際バカロレア（IB）

2010年代の中央教育審議会における中心的議論

- ① 教育の質の向上
- ② グローバル人材の育成

2010年度：グローバル30補助事業（国際化拠点整備事業）

2010年度：日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業

2012年度：グローバル人材育成推進事業（Aタイプ+Bタイプ）

2013年度：大学の世界展開力強化事業

2014年度：スーパーグローバル大学事業

さまざまな失敗：

特に、日本人学生のほとんどの英語力が、国内外で外国の学生と一緒に英語で授業を受けられるだけのレベルに達していなかった。

そのような課題を克服するために注目され始めたのが国際バカロレア（IB）

2012年6月：「グローバル人材育成推進会議」：

IB資格の認定校と、それに準じた教育をする学校を5年以内に200校程度に増やすよう提言

2013年5月：教育再生実行会議

一部を日本語で教えるIBプログラムの開発、導入を進め、大幅な増加（16校→200校）を図る

2013年6月：日本最高戦略（アベノミクス第3の矢）

2018年にはIBDP認定校を200校まで認定させるという目標を明記

2014年度：スーパーグローバルハイスクール

（本校がIBに興味を持ち始めたのは、この頃）

IBは英語で行われる外国産の教育プログラムで、日本語・英語バイリンガルになるための教育

→ 大きな誤解

IBの学習者像は、全く異なる



IBの学習者像：すべてのIBプログラムは、**国際的な視野をもつ人間**の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球とともに守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探求します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

(1) 探求型概念学習

IBの学習は、事実記憶型学習ではなく探求概念型学習である

“青い鳥” Global Challenge Program：学科学年横断縦断STEAMプログラム

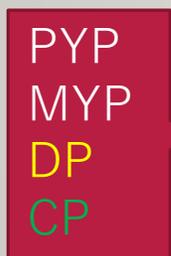
(2) リベラルアーツ型学習

IBではすべての領域の学習を万遍なく行う

IBに特徴的

(例) DPプログラム：6つの教科学習（2言語、社会科学、自然科学、数学、芸術）
TOK（知の理論）、CAS（奉仕活動）、EE（小論文：卒業研究）

(3) 「使命」「学習像」「学習プログラム」の三層構造 + 全人教育



4つのIBプログラムに共通 まさに本校が目指すグローバル人材育成に相応しい！

従って、IBプログラム、特にCPは、まさにKOSENで目指すグローバル人材の育成に資するプログラム

国際バカロレアCP：キャリア関連プログラム

16歳から19歳までの生徒を対象とした総合学習プログラム。生徒は、キャリア関連プログラムにふさわしいと思う少なくとも2科目を選びそれについての勉強を進める。そして、その科目に関連のある実地体験、職業体験を行う、という学問と職業体験を同時に行うプログラム

視点II： 教育活動

1. 全体的なカリキュラム設計

海外プログラム（必修・選択）が、英語教育科目や異文化理解・異文化対応力育成科目、英語で専門を学ぶ科目などと、どのようなつながりを持ってカリキュラムの中に埋め込まれているか？

カリキュラムの変更（進行中） → **カリキュラムマップ** → 作成が必要

中心になるのは、**学科学年横断縦断STEAM科目**の構築（**IB**とも関連）

↓
海外プログラムが他の科目やプログラムと切り離されて行われているのでは、教育効果は薄い

2. 英語コミュニケーション力育成科目のカリキュラム

①英語科目間の連携かつ段階的なつながりがどのように図られているか

- 内容の統一性の確保
- 英語科目間の連携
- 学年進行に伴う統合的な段階性

②英語コミュニケーション力を特に高めたい学生及び英語コミュニケーション力が特に低い学生に対してどのようなオプションが用意されているか

- 教育目標に応じた英語コミュニケーション能力の育成の仕組みになっているか
- 教育目標を達成するために組織としてどのような工夫が凝らされているか

グローバルコミュニケーション研修（高めたい学生向け）

低い学生向け→ない

3. 異文化理解・異文化対応力育成科目のカリキュラム

- ① 異文化理解・異文化対応力育成科目がどのように用意されているか。
特に日本語以外を用いる科目がどの程度配置されているか。
- ② 異文化理解・異文化対応力を高める科目が他のプログラムとどのように連携しているか。

「国際比較文化論」（専攻科）のみ→他のプログラムとの関連？

4. 専門を英語で学ぶ科目のカリキュラム

- ① 英語による専門科目がどの程度準備されているか
- ② 英語科目との連携がどのように図られているか
- ③ 日本語による専門科目との連携がどのように図られているか

Soft CLIL
Hard CLIL

実施中→今後、さらに**CLIL**の拡大を目指す（**IB**と関連）

5. 正課の海外プログラム（留学を含む）

- ① 参加率・履修率
- ② 事前学習→海外プログラム→事後学習の関連構築

6. グローバル化に対応する正課外の海外・国内プログラム

- ① どのようなものが用意されているか
- ② 参加率・履修率
- ③ 事前学習→プログラム→事後学習の関連が図られているか

海外インターンシップ
海外ボランティア活動
海外研修
海外語学研修
長期・短期留学生受入

全てコロナ禍により中止

オンライン研修

異文化交流型
COIL型
PBL型

視点III： 教育支援（支援制度・教育環境・組織体制）

1. グローバル化に対応した教育支援

- ① 経済的サポート体制の充実度
- ② 履修上、海外プログラム等に参加しやすい仕組みが用意されているか
- ③ リスク対策、セキュリティー対策の充実度

②は弱い→一部の学年で「サービスラーニングターム導入」は必須

2. キャンパスのグローバル化を活用した教育支援

- ① 看板等の英語化
- ② ピアサポート
- ③ バディ制度やメンター制度
- ④ 国際（混在）寮
- ⑤ 海外留学生との交流を異文化体験や英語コミュニケーション能力向上につなげるどのような仕組みがあるか

メンター制度

国際（混在）寮：高城寮は、もともと国際（混在）寮
（そのメリットは生かされているか？）

SA(Student Ambassador)組織化

3. 組織体制

- ① グローバル化対応教育を推進する組織
- ② 学科等との連携

“青い鳥”Global Challenge Program WG



STEAMプログラム構築 4年以上前に話題として提出→現在、導入を検討中
授業の一部英語化 (CLIL導入) 一部の教員が実施 (全体的な効果は?)
国際バカロレアやCDIOに関して、FD講演会等を開催、国際バカロレアWG

【令和3年度事業の取組の概要】 視点I~III

基礎力養成

1. 海外研修プログラム単位化：実施済 他のコンテンツの単位化に関して令和4年度に議論
2. 英語関連需要の指導内容・方法見直：グループオンライン英語レッスン、多聴多読授業再開準備（令和4年度にはオンライン多聴多読の試行）
3. 課外活動（英語等）充実：イングリッシュ・ルーム、オンライン異文化交流会
4. e-Learning等の拡充：グループオンライン英語レッスン導入。統計学的に、その効果の検証を準備（統計学解析FD研修）
5. **STEAMプロジェクト**構築：IBのEEに相当する教育プログラム：カリキュラムを全面的に見直し、導入を検討中
6. **CLIL授業実践**：日本人教員が本科1年生科目の一部、及びアメリカ人特任教員が**CLIL**コンテンツの開発、**CLIL**授業の実践。また**CLIL教科書**を出版した。
7. **IB関心校として登録**。DPのみならず、日本初の**CP**プログラムの導入を検討し、**CPプログラムの一部日本語化**を実現
本科1年生科目で数コマ「**知の理論（TOK）**」の授業を実施
IBアジア太平洋地域日本開発マネージャー・星野あゆみ氏による**FD**講演会を開催し、学内での理解を促進するとともに、**国際バカロレア導入WG**を立ち上げ

高度人材

1. サービスラーニングチーム導入：教務においてカリキュラム改正の全面的な見直し中
2. 技術者教育パッケージ：コロナ禍によりオンラインでの受講のみ
3. “青い鳥”**Global Challenge Program**：教務において**カリキュラムの全面的な見直し** 専攻科ではクォーター科目を実施
4. **CDIO**関連大会への参加が、コロナ禍により困難となったため、加盟申請見送り

視点IV： 個々の学生の達成度とカリキュラムマネジメントに資する アセスメント

1. 学生の達成度のアセスメント

語学および語学以外について

①語学→GTEC, TOEIC, 英検→ **2技能**試験で良いのか？

②語学以外→「異文化対応力テスト」の活用

(グローバル人材育成教育学会と共同開発)

高専版 Global JSAAP構築

AiGrow試行

PROG

BEVI-3

AiGrowを試行→データの解析がかなり困難

2. カリキュラムマネジメント

アセスメントをカリキュラムマネジメントにどのように活かしているか

- ①語学→英語力向上タスクフォース
- ②語学以外→そもそもグローバル人材育成のカリキュラムがない
現在、教務でカリキュラムマップを構築中

視点V：英語以外の外国語について

中国語、ドイツ語は選択科目としてはある

どの程度、身につけているのか？（アセスメントは定期試験のみ）

学生の知識となっているのか？ 異文化理解が促進されているのか？（分析が必要）

コロナ禍を、良い機会として捉え、協働オンライン教育プログラムの構築や
様々な既成のオンラインコンテンツを用いた、教育のDXが必須である

【令和3年度事業の取組の概要】 視点IV~V

基礎力養成

1. 英語関連需要の指導内容・方法見直：グループオンライン英語レッスン、多聴多読授業再開準備（令和4年度にはオンライン多聴多読の試行決定）
2. **e-Learning**等の拡充：グループオンライン英語レッスン導入
統計学的な効果の検証を実施準備（統計学解析**FD**研修）
3. **STEAM**プロジェクト構築：教務においてカリキュラム改正の全面的な見直し中
4. **TOEIC**は例年通り実施。異文化対応力テストは実施していない（海外研修自体が実施できていないため）が、新しいバージョンのテストを開発した。また**AiGrow**を学生対象に試行したが、実施やデータの解釈に困難を感じ、次年度は他のテスト、具体的には**PROG**あるいは**BEVI-3**の導入を検討している。

高度人材

1. 本校のポートフォリオシステム「きゃりPi」がと連動し、**AP**事業で構築した**ディプロマ・サプリメント出力システム**とも連動し、**manaba**ポートフォリオシステムを構築（令和4年度4月より導入）
2. **CDIO**加盟の準備再開
3. 本事業のプロモーションのため、**YouTube**や**Facebook**にアップロードするプロモーションを学内公募で作成し、グローバル高専としてのコンテンツの充実を図る。
4. “青い鳥”**Global Challenge Program**及びモンゴル高専支援校、**JF**プロジェクトメンバーとして、タイ、ベトナムの**KOSEN**やフィンランドの大学との交流も視野に入れながら、協定校を中心に様々な文化に触れるプログラムを構築・実施を準備

グローバルエンジニア育成事業を成功させるには・・

英語教育だけではだめ！ そもそもグローバルエンジニア育成は英語教育の話ではないはず！



人材が国際的な社会性あるいは公共性を持つ



異文化を理解しているということではなく、多文化の中で考え行動できるという認識が必要



学生たちが「主体的に」学習に取り組むことが大切であるように、教職員が能動的に様々な学習に取り組むことが必要

育成する人材像の確認と、そのような技術者を育成するための教育プログラムの構築

教職員FD/SDプログラムの構築と実行は最重要課題